

2021年10月9日

廃棄物処分場基本計画（9月12日委員会資料）の問題点に関するご報告

県産業廃棄物最終処分場建設に反対する連絡会会員
鈴木 鐸士

この度9月30日になって、県産廃最終処分場の基本計画（9月12日委員会資料）見ることができた。地質調査・水文調査の結果、および廃棄物処分場概要と工事基準、トンネル方式の搬入道路などがいろいろと開示された。

先に公開されている施設設備のイメージ図とあまり変わってはいないが、廃棄物貯蓄槽が二段に分割されて、いずれも底面の標高は引き上げられ、浸出水が導出し易くなるとともに、地下水から遠ざけるよう少し改善された。しかしながら、8m幅の搬入道を追加したことにより、浅い皿状の廃棄物貯蓄槽の面積は増々狭くなってしまい、巨大容量の244万^mを埋立することができずに、皿状の廃棄物貯蓄槽の縁面の上部に廃棄物をうず高く盛上げるよう計画されている。このような廃棄物は、崩れ易く、洪水に流されやすく、極めて不安定な状況であると言える。前代未聞の異常で危険な産廃処分場である。

極め付けの問題点は、豪雨時に唐津沢の上流部の広大な降水域からトンネル口付近に流入する激甚な洪水に対する災害対策が全く成されていないことである。私どもは機会あるごとに、現実的に災害対策は不可能であることを訴えて来ましたが、無視されるだけで、設置計画には、洪水対策は微塵も見られません。この度の行政訴訟には、洪水対策の不備を論点の一つに取り上げて戴いているので、成り行きを大いに期待しております。

これまで秘密裏に非公開で建設計画が進められて来ましたが、この度公開された少し具体的な計画概要は、大変危険な要素が多く、容認できません。そこで、産廃処分場の状況を検討する際に役立つことを願って、私なりに問題点をなるべく詳しく指摘して、皆様にご報告いたします。

地質・水文調査の結果

図1調査計画平面図に示されるように、唐津沢の採石場跡地は大きな窪地になっており、底地は谷沿いに約500mほど伸びており、標高は90～100mである。湖水面（湛水面）は降水状況で変わるだろうが、通常は標高110m位である。

沢の西側の岩壁面の数か所からは湧き水があり、谷底に向かって流入している。唐津沢の上流部の広大な降水域から流入する表流水は、トンネル口付近を通過して、途中伏流することはあるが、湖水の先端部に流入している。豪雨時に上流部の広大な降水域から流入すると想定される激甚な流れは、上記の表流水と同様な経路で湖水の先端部に流入するはずである。

近接して流れる別経路の表流水は、沢の西側の岩壁面横切って通された水路を經由して、直接鮎川に放流されている。豪雨時には、既設の水路では大容量の排水はできず、大部分は谷間の湖水に流入する。

湖水面は、地下水の水位面であり、地下水は周囲から地中を通じて直接に湖水に流入している。当然に、湖水から鮎川あるいは湖水の周辺に流れ出す地下水流がある。すなわち、唐津沢は、通常でも水が集まり流れる河である。転載図面であり、鮮明にお見せできないが、詳しくは県の原典を見て頂きたい。

唐津沢は硬い岩盤で、産廃処分場に適しているかのような宣伝がなされているが、実際には採掘跡の深い谷間は盛土埋立された軟弱な基盤の上に廃棄物貯蓄槽が設置されるので、唐津沢は巨大な廃棄物処分場の建設地として最も不適格である。

廃棄物貯蓄槽の洪水災害は避けられない状況

図2の全体配置計画図は、先に公開されているイメージ図とあまり変わってはいませんが、廃棄物貯蓄槽は、上下二段に区切られて底面の標高は高められ多少改善されています。搬入道路が記入されたので、その分廃棄物貯蓄槽の面積が確保できず、設計計画の担当者は大分苦労したと想像されます。図面には、説明はありませんが、搬入道路にはトンネルがあり、その出入口が豪雨時に唐津沢の上流部から流入する激流の流路の真下にあたります。

詳細な図面は未だ公開されていませんが、谷間の流路の底面が標高 185m 程度の所の真下に、標高 172m の搬入道路のトンネル口を設置しているので、高さ 15m 程度の滝となって、搬入道路と廃棄物貯蓄槽に向かって Q_a の雨水が流入することになります。このような流れの状況の説明図や流れの詳しい解析結果をなるべく早めに用意したいと思いますが、防御壁や誘導路などの設置をあれこれ実施したとしても、谷間に設置される巨大な廃棄物貯蓄槽を洪水から避けることは不可能でしょう。

また、 Q_b の流れの大部分は、搬入道路の側面に流入するでしょう。そして、 Q_d の流れは、廃棄物貯蓄槽の先端近くの窪地を經由して、廃棄物貯蓄槽に流入することでしょう。搬入道路、外周道路は描かれているが、排水路が全く見られないのは不思議である。

豪雨時に唐津沢上流部降水域から、廃棄物貯蓄槽の先端部に流入する雨量の詳細については、先の(広大な唐津沢の降水域分析と沢形状の水理学的な特性に関する報告 2021.9.10)を参照願いたい。

廃棄物貯蓄方法の異常性

廃棄物貯蓄槽の中央部 B-B 断面図が、図3造成計画(横断面)に示されている。固い岩盤の深い谷状の現況地盤には、搬入道路(8m)と外周道路(6m)をとると、廃棄物貯蓄槽に面積が十分に取れなくなっているようである。また、薄い皿状の廃棄物貯蓄槽は、大ききの割に埋立てる容積が取れないため、廃棄物貯蓄槽の縁面以上に廃棄物をうず高く盛上げている。このような廃棄物は、崩れやすく、洪水に流され易く、極めて不安定な状況である。

埋立てる廃棄物と盛上げる廃棄物はほぼ同量なので、本来埋立てると言っているのだから、盛上げることを無くせば、正当な廃棄物処分量は半分の 122 万³m³となるはずである。候補地選定時に、唐津沢の廃棄物処分容量の算定に重大な誤算があったことに原因がある。

廃棄物埋立の最大高さが 45m にもなってしまうのも、大変異常で危険であると思われる。盛土埋立の所に設置される廃棄物貯蓄槽のライナーには、廃棄物埋立の高さが異常に大きければ、多大な変形、剪断力が掛かり、浸出水の漏水の危険性は否めない。

また、盛土埋立の最大高さが 35m にもなると、増しては地下水の豊富な状況下では、強震時には液状化による廃棄物貯蓄槽の破損の危険性も否めない。

廃棄物貯蓄槽の谷沿いの断面の様子が、図 4 造成計画（立て断面）に示されている。廃棄物貯蓄槽は、谷沿いに 536m に渡り、その縁面の標高が 145m から 180 まで大幅に変化する、縁面が傾斜した容器である。縁面の傾斜は 6.5% で、赤い点線で示されている搬入道路の傾斜 7.0% とほぼ同じである。

廃棄物貯蓄槽が二段に分割されおり、上段の区域の底面の標高は 135m で、廃棄物盛上げ上面の標高は 186m であり、廃棄物埋立の最大高さが 47.4m である。下段の区域の底面の標高は 125m で、廃棄物盛上げ上面の標高は 180m であり、廃棄物埋立の最大高さが 53m である。廃棄物は谷に沿ってほぼ全域でうず高く盛上げられて、壮大なごみ山が造られる。

ごみ山の完成図が、図 5 全体計画図面（埋立完了後）に示されている。再上面標高 186m の巨大なごみ山の景観は圧巻だろうと推測されます。なるべく早くどなたかに景観図を造ってもらえるとよいと思います。

搬入道路の経路予測と予想経路の状況

この度の公開資料では、トンネルらしきものが描かれていますので、先走って搬入道路の経路とその周りの状況を調べてみました。

トンネルの出入り口の標高は 172m と記されていますので、トンネル付近の様子を図 6 搬入道路トンネル部分の経路予測図に示します。途中の山が高いので、桜川沿いの傾斜が緩やかになる標高 150m 位のところまで通すのが妥当かと考えました。トンネルの長さは約 1020m となるので、工事費は相当掛かると推測されます。峠越えの搬入道路の建設はあまりに無謀ですから、トンネル利用他方法はないでしょう。

トンネル口から搬入道路の入り口までの様子を、図 7 搬入道路入口からトンネル口までの経路予測図に示します。大久保中学付近入口からトンネル口までの距離は、約 2100m であり、桜川沿いのため、谷間は狭く曲がりくねっていますので、8m 幅の立派な道路を通すには、陸橋のようなものが増えるでしょう。特に入口から中丸団地を迂回する所は状況が厳しく高等技術を要するかと推測されます。トンネルほどではないかも知れませんが、工事費・工期はかなりかかると考えられます。

以上